

### 第3章 千葉県の自然・文化と生物多様性

#### 1. 千葉県の自然環境の特徴

##### 南北の多様な動植物が出合う豊かな里山海

日本列島のほぼ中央、本州の東南端から西太平洋につき出た房総半島は、その沖で暖流の黒潮と寒流の親潮がぶつかり合うところです。館山付近には熱帯起源のサンゴやチョウチョウオが生息し、また北太平洋からはサケやサンマがやって来ます。陸域においても、中国南部に端を発する常緑広葉樹林帯のほぼ北限域にあたる房総半島では、常緑広葉樹と北日本に分布の中心を持つ落葉広葉樹とが混生します。このように南北の動植物が出会う多様な生物相、そして穏和な気候に豊富な水条件、さらには肥沃な土壌条件にも恵まれた千葉県は、その豊かな自然環境と調和した3万年以上にのぼる人々の生活・文化の歴史がありました。そして、この人・自然・文化との調和・共存の歴史は、人が生きるにおいて、この上ない豊かな里山海の生態系をもたらしたのです。

##### (1) 房総半島の地形・地質とその成り立ち

今から十数万年前、関東平野のほぼ全域は古東京湾と呼ばれる浅い海でした。その海の南部には現在の房総丘陵が三浦半島とつながり、両方で一つの島になった時期もありました。古東京湾の時代に海底で堆積した土砂は現在の関東平野全体の基盤を成し、その後の気候変動に伴う陸化や火山灰（関東ローム層）の堆積等によって現在の房総半島が形成されました。こうして出来た房総半島の地形・地質ですが、北部と南部では様々に違いがみられます。

北総域は、北に利根川、東に九十九里浜の太平洋、西には江戸川及び東京湾内湾の各水域が外周を縁取り、印旛沼と手賀沼の内水面はかつての利根川の河道でした。陸域は標高 20・80m の洪積台地と沖積低地から成り、この台地に樹枝状の小河川が入り込む状態は谷津地形とよばれます。北総域の地盤のほとんどは海成の砂層で、部分的に粘土層がはさまれています。そのため地盤に多量の地下水が含まれ、谷津には湧き水も多くみられます。

一方の南総域は、東が太平洋、西は東京湾外湾に面し、一部で火成岩がみられるもののほとんどは堆積岩からなる丘陵地形が広がります。この房総丘陵は、標高 200・400m の峰々で、その最高は嶺岡山系、愛宕山の 408m と決して高いものではありません。しかし、その比較的柔らかな岩盤は急峻で谷深い山岳的な地形をつくりました。

##### (2) 房総沖の黒潮・親潮と東京湾の生物

フィリピン沖に端を発する黒潮は、冬でも 12℃ を越える暖流で、カツオやマグロなど多くの南の海の幸をもたらします。この熱帯起源の黒潮は館山の沿岸に、キクメイシやエダミドリサンゴなど世界の北限の造礁サンゴをもたらしました。このサンゴ礁の海にはしばしばクマノミやチョウチョウオ等の熱帯魚もみられます。

一方、北のベーリング海やオホーツク海から北日本の沿岸を南下する親潮は、鮭子から九十

(図表等を掲載予定)

九里沖に達します。秋から冬にかけてその勢力が増す時期、マイワシやカタクチイワシ、サンマが房総半島沖にみられ、九十九里の河川にはサケの遡上もみられます。そしてこのサケは、ときに南房総のサンゴの生息する海を廻り東京湾でも記録されます。サンゴの海をサケが泳ぐ、まさに南北の生物の出会いを象徴する千葉の海ならではの状態です。

大東岬と東京湾の富津岬を結んだ線の南側は、岩礁の海岸と砂浜が交互にみられる風光明媚な海岸で、その大部分は南房総国定公園になっています。また、外房の夷隅川河口には潟湖(ラグーン)が残され、その沖には浅い岩礁地形の磯根が広がっています。このように変化に富んだ南房総の海にはタイやイセエビ、アワビやサザエといった多種多様な魚貝類とともにヒジキやテングサ、ワカメ等の海藻も多く、これらは大きな漁業資源となっています。

東京湾内湾は、かつては広大な干潟が広がっていた浅い海です。江戸川放水路河口の泥質干潟には北限のトビハゼが生息し、アサリやアオヤギ、かつてはアオギスやハマグリ、アサクサノリなど、その大きな干潟の恵みは、縄文の昔から人々の生活・生業の糧でした。現在でも三番瀬や小櫃川河口、富津岬等に豊かな干潟がみられます。しかしながら、この東京湾の干潟の9割は埋立・開発により消失してしまいました。また周辺の人口の急増によっても東京湾は大きな影響を受けてきました。このような東京湾をはじめ房総半島周辺海域における自然環境の保全・再生は重要な課題となっています。

### (3) 常緑広葉樹林と落葉広葉樹林の植物相

房総半島の植生は暖温帯性の常緑広葉樹林帯(照葉樹林帯)の北限域にあたります。この植生は、中国南部を中心として西はヒマラヤの山地帯に達し、東には黒潮沿いに日本列島を北上します。この森林植生を代表する樹種としてはタブノキやスダジイ、アカガシ等の高木のほか、ヤブツバキやカクレミノといった中低木、またホソバカナワラビやイノデ等の草本植物があげられます。県木のイヌマキも千葉県を北限とする常緑樹の一種です。また、栽培され名産になっているビワも中国南部から南日本に自生する常緑広葉樹です。

南房総の海岸にはトベラやマルバシヤリンバイの常緑低木のほか、無霜地帯には亜熱帯に分布の中心をもつ多年生草本のハマオモトの生育がみられます。

一方、千葉県の北部から丘陵地帯にかけては、冷温帯性のコブシやイヌシデ、コナラ、ケヤキ、フサザクラといった落葉広葉樹の森林が多く、これらは、房総半島以北に中心をもつ落葉広葉樹林帯(夏緑樹林帯)の構成種です。これらの落葉樹は、人為管理によって常緑樹林への遷移が阻害された雑木林のほか土壌の薄い急傾斜地や尾根、また冷涼な溪谷などに多くみられます。千葉県の名産のナシは、北総域で多く栽培され日本一の生産額の果樹ですが、その原種は落葉広葉樹のヤマナシとされています。

房総半島南部においても丘陵の山頂や尾根付近にはヒメコマツやヒカゲツツジ、スズタケといった他では主に標高1000m以上の山地帯に生育する植物がみられます。これは寒冷期に低地に生育していた種がその後の温暖化で高所に移動し、高い山のない房総半島ではかろうじて丘陵地帯の山頂付近に残存する、いわば「すづまり現象」と解釈されています。このような残存

(図表等を掲載予定)

的な植物は低地にもみられます。沼地にみられるミツガシワ、湿原のトキシソウやサギソウ、また九十九里海岸のハマナスのほか雑木林の林床の春植物、カタクリやイチリンソウなどもその分布の中心は山地や房総半島以北です。

昭和 26 年、千葉市検見川の工事現場で、約 2000 年前の泥炭層から古代のハスの種子が発見されました。このハスは発見者の大賀一郎博士にちなんで大賀ハスとよばれ、今では全国で栽培されています。最近でも印旛沼や手賀沼などの土中から一度は絶滅した沈水植物のガシャモクが再生し、セキシウモやオニバスも低湿地の土中からの再生が確認されました。

#### (4) 人とのかかわり深い動物相

地史的に本州との連続、分断が繰り返されてきた南総域の丘陵地帯にはその歴史を物語る動物相が多くみられます。昆虫のボウソウヤマキマダラヒカゲ、アワカズサオサムシ、シロバネカワトンボ等の生息は三浦半島とのつながり及びその後の島化、分断化の影響と推定され、シカやニホンザル、またヤマアカガエルやオオトラカミキリ等は氷期の本州との強い結びつきを物語ります。

昆虫のシャープゲンゴロウモドキやオオミズクサハムシ、またナカムラオニグモのように北日本との関係の深い種の生息があります。その一方、暖温帯の常緑カシ類を食草とするルーミスジミヤ、南方系の種でかつては房総での生息しなかつたナガサキアゲハやクロコノマチョウが最近確認され、これについては地球温暖化の影響も推定されます。

さらに近年、アカゲザルやシカの一種キョンといった外来種も多く生息するようになっていきます。かつては絶滅も心配されたシカやニホンザル、そして房総半島からいったんは絶滅したがその後人為移入されたイノシシも増え、今では農作物等に大きな被害を及ぼす状況になっています。

北総域に多い谷津田（谷津低地の水田）とその周辺には、稀少な魚類のミヤコタナゴやクサヤツメ、ホトケドジョウの他、人々の生活とも結びついた多様な動物相がみられます。谷津田周辺には猛禽類のサシバやオオタカも多く、沼や干潟の水辺には多様な野鳥が生息しています。印旛沼のサンカノゴイをはじめ、最近ではマガンやコウノトリの飛来・越冬も確認されています。日本では絶滅してしまったトキですが、千葉では昭和 28 年まで飛来し日本の太平洋側での最後の記録となっています。

近年、東京湾岸を中心に都市化が著しく、自然環境の変貌は外来生物や、移入生物を増加させています。カミツキガメやブラックバス、ブルーギル、ハクビシン、アライグマの定着・増加は本来の生物相および生態系を大きく変質させつつあります。

(図表等を掲載予定)

## 2 生態系のまとまりからみた県土区分

県戦略を実行に移し、生物多様性の保全や復元を図るためには、各地域における生物多様性の状況や生物多様性に影響を及ぼしている人為の状況に応じたきめ細かな対策を講じる必要があります。

そのためには、まず県土を生物多様性と人為の観点から見て同じような地域に区分する必要があります。千葉県では、2002年に「千葉県ビオトープ推進マニュアル」を作成しています。その中で、千葉県を生態系の基盤となる流域、地形分類と植生に着目して4つの区域に分け、さらにそれを合計8つのサブ区域に分けています。

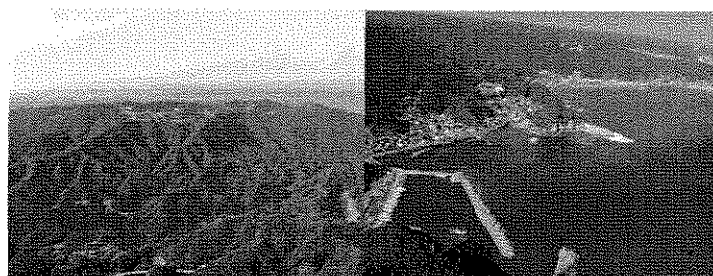
本書では、これらの県土区分を基本として生物多様性を見ていくことにします。なお、「千葉県ビオトープ推進マニュアル」では陸域を対象としていますが、千葉県の生物多様性の特徴である干潟、浅海域、藻場、磯、サンゴ礁という変化に富んだ海域も含めることとします。



I - a 北総内陸区域 (印旛沼)    I - b 銚子区域 (銚子市)    II - a 京葉臨海区域 (千葉港)



II - b 京葉内陸区域(木更津市)    III - a 九十九里臨海区域(九十九里浜)    III - b 九十九里内陸区域(大網白里町)



IV - a 内房区域 (鹿野山)    IV - b 外房区域 (勝浦湾)

